

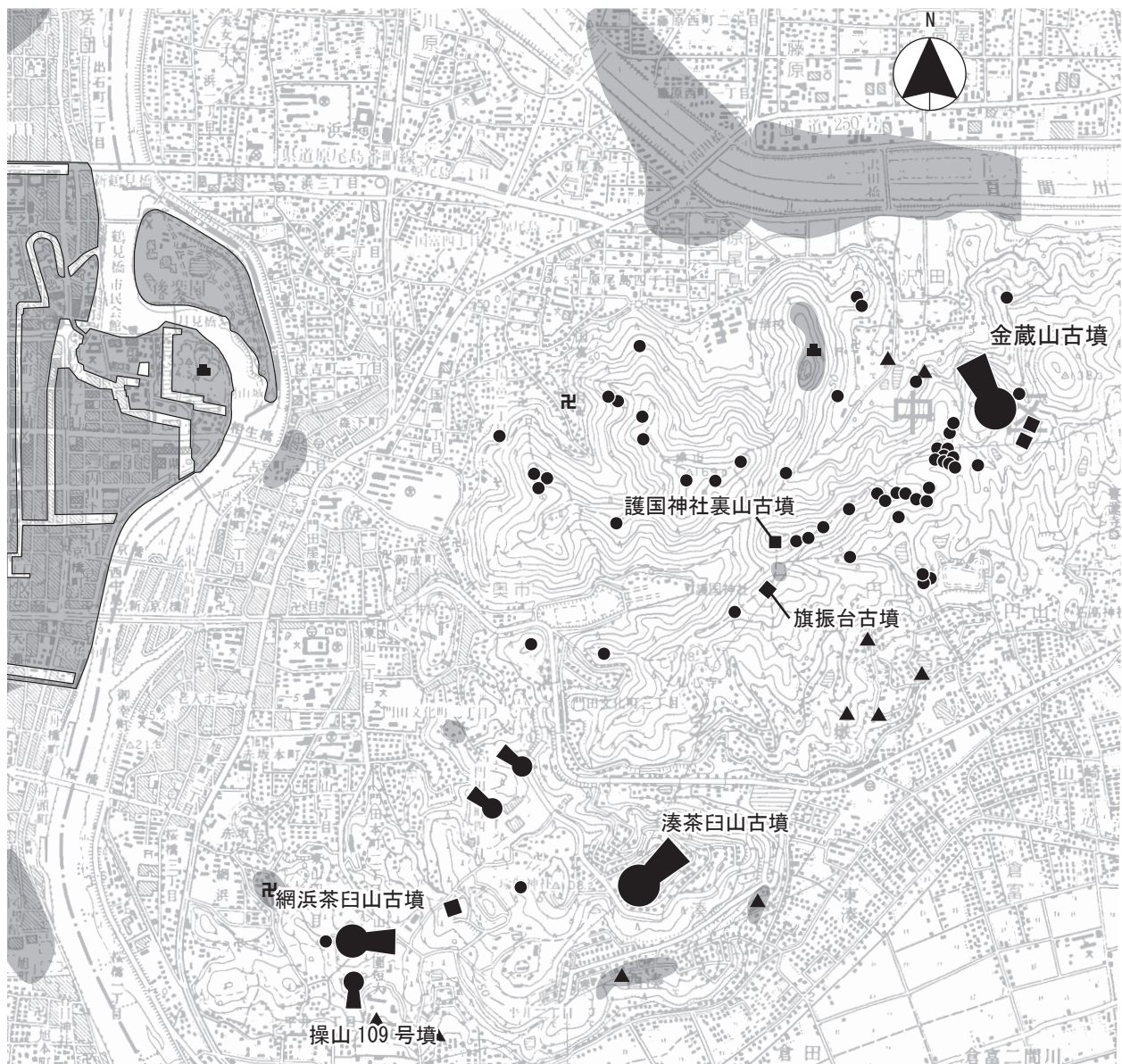
かな くら やま こ ふん
金 蔵 山 古 墳

範囲確認調査（第2次）現地説明会資料

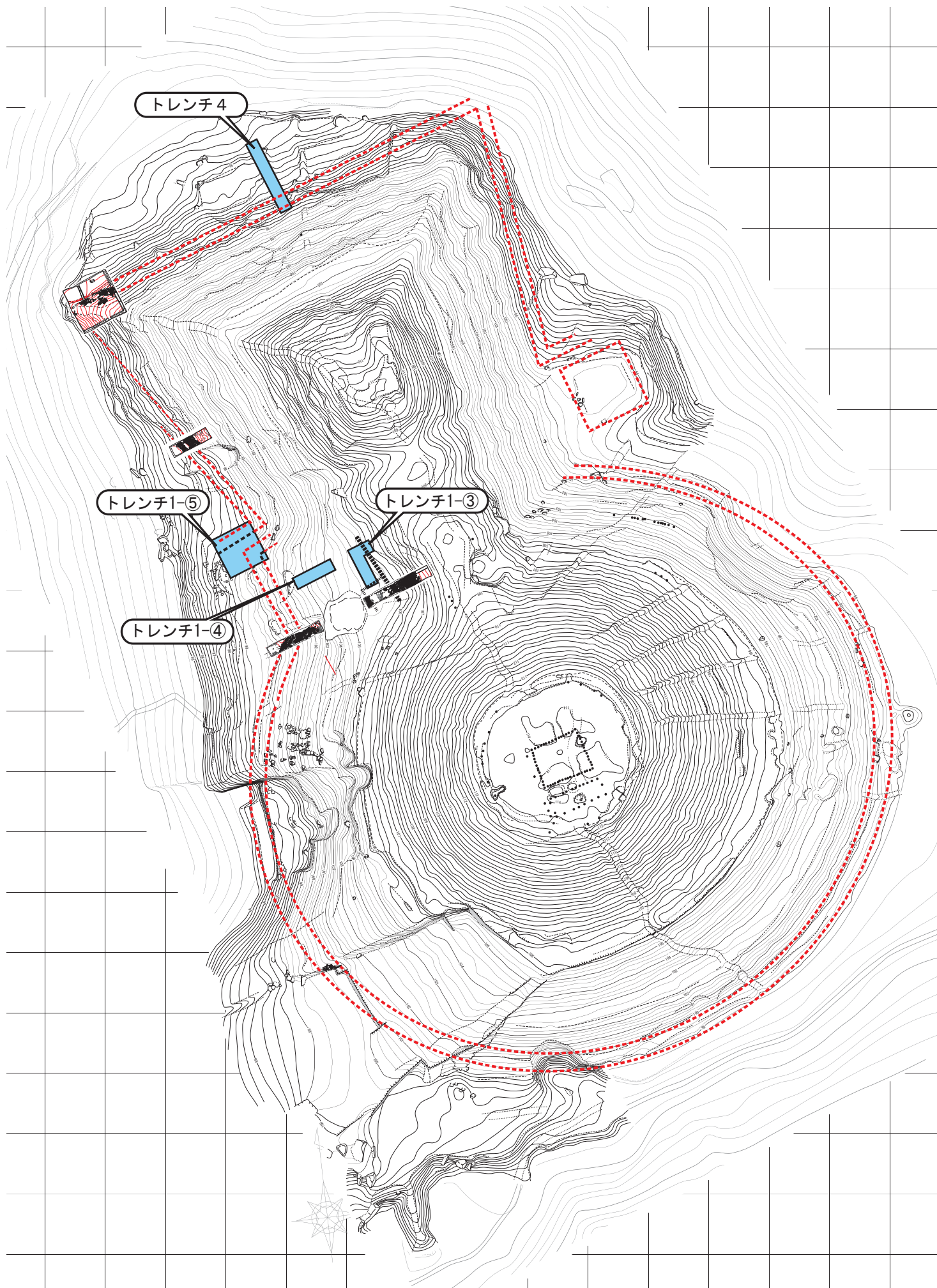
古墳の概要

操山丘陵のほぼ中央、標高 100 m ほどの山頂に位置する前方後円墳です。墳長 165m といわれ、四世紀後半から五世紀初頭に造られた古墳と考えられています。造山古墳築造以前では中国、四国、九州地方で最大の古墳です。明治期以降数多くの出土品が出土したといい、昭和 28 年には倉敷考古館を中心に発掘調査が行われました。発掘調査は後円部墳頂を中心に行われ、2 基の竪穴式石室、副葬品用の小石室、それぞれの石室を囲む埴輪列などが見つかるとともに、多量の副葬品、多彩な埴輪類が出土しました。

現在、古墳全体が山林となっており、古墳全体を観察することはほとんどできません。吉備を代表する古墳のひとつであり、規模や埋葬施設などの遺構、優秀な副葬品や埴輪類など学術的、学史的にも非常に価値が高く、保護や活用を図っていくことが課題となっています。



金蔵山古墳と周辺の遺跡



金蔵山古墳の墳丘とトレンチの配置 (1/800)

発掘調査の概要

岡山市教育委員会では金蔵山古墳の墳丘の規模、形態、構造等を追求し、将来は史跡等の保護の措置を図っていく計画で、昨年度より発掘調査を実施しています。昨年度の調査では、前方部の西側に造り出しが附属すること、前方部西側側面、北西隅角の墳端の状況や構造が判明しました。

今年度の調査は、西側造り出しの形態や構造、前方部前端の位置や構造を追求するため、西側造り出し周辺にトレンチ1-③から1-⑤、前方部前端にトレンチ4を設けました。

トレンチ1-③

トレンチ1-③は造り出し上面中央部の状況を追求するため設定しました。

金蔵山古墳の造り出し上面は後円部下段平坦面と上段平坦面の間にあたる標高104.5m付近にあります。トレンチ内では、昨年調査部分と異なり全面に小さな円礫を敷き詰めており、形象埴輪などは置かれていません。トレンチ北端部では、昨年検出した円筒埴輪列の続きを検出しています。また、トレンチ南端付近には柵形埴輪の破片が散乱しており、これを境に南側では礫が少なくなっているようです。このことから、もとはこの付近に東西方向に柵形埴輪が並べられており、昨年検出した埴輪を配置する空間と祭祀の執り行われた礫敷きの部分を区画していた可能性が高いと思われます。

トレンチ1-④

トレンチ1-④は造り出しの上面と墳端部との間の構造などを追求するために設けました。

トレンチ内はほぼ全面が盛土で、土層断面では岩盤との間に墳丘築成前の旧表土層が観察できません。葺石や段などは確認できず、造り出しが1段で構成されていたことや、上面の平坦面が広いものだったことが想定されます。

トレンチ1-⑤

トレンチ1-⑤は造り出しの形態や角の状況など追求するために設けました。

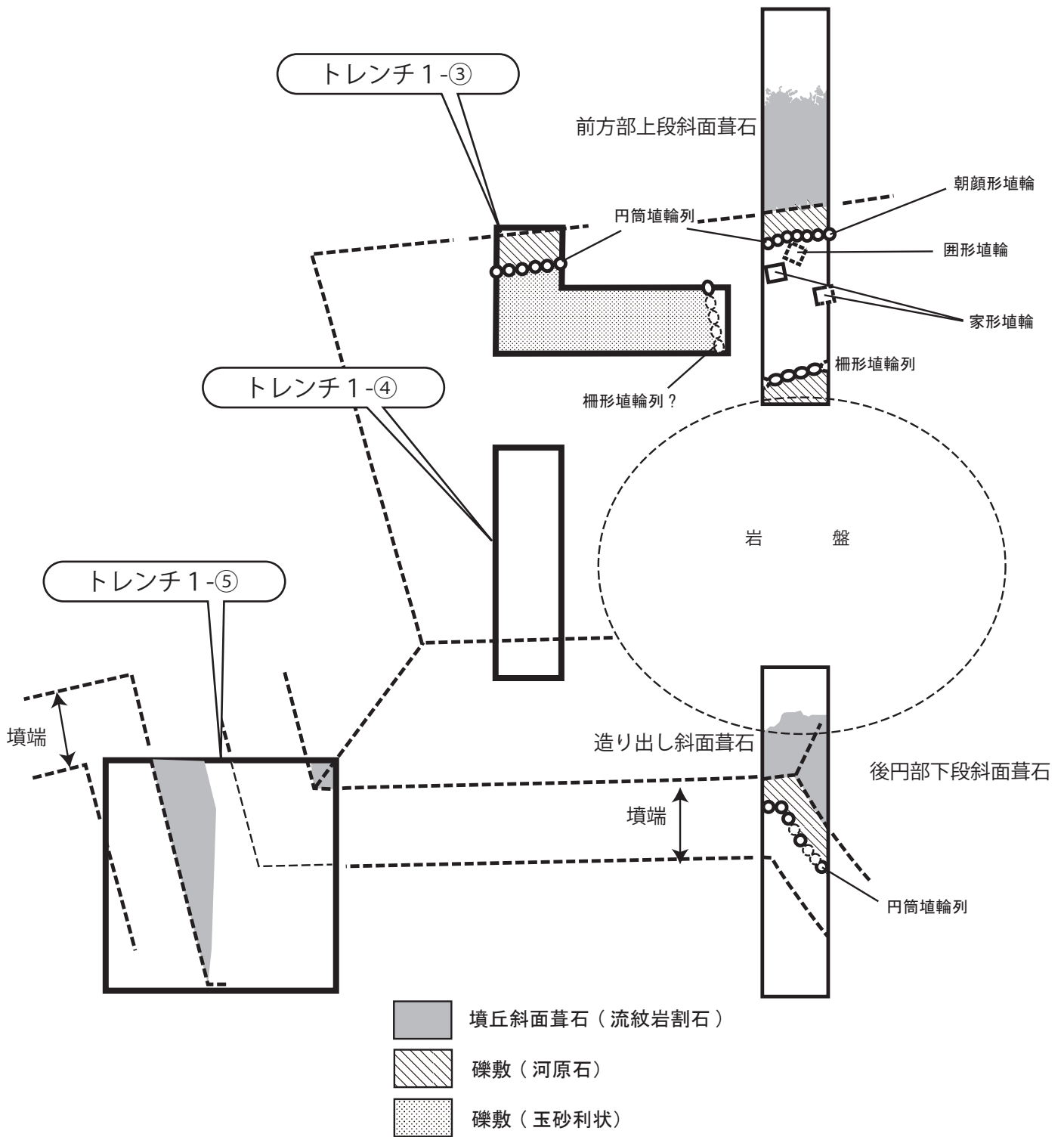
ここでは上下2段に葺石を検出しています。上段の葺石は葺石下端が標高100m前後の高さで、昨年検出したくびれ部付近の墳端と高さが一致します。円礫を敷いた部分や埴輪列は失われていますが、くびれ部の墳端に相当する葺石と考えられます。

一方、下段の葺石は造り出しの北側斜面にだけ残っています。葺石下端部高さは標高97m前後で、こちらは昨年度のトレンチ2、トレンチ3で検出した墳端の高さと共通します。後円部側の墳端と前方部側の墳端の高さの差を、この部分で段を造ることで形成していることが判明しました。

トレンチ4

トレンチ4は前方部前端の位置や構造を追求するために設けました。

ここでは、昨年度のトレンチ3では残っていなかった、墳端の礫敷き部分や葺石の根石を埋める盛土がかろうじて残存しています。墳端は削平されていますが、これまでに検出している墳端の段の幅が3m程度ですので、ある程度墳端位置を復元できます。なお、後円部側の墳端を確認していないため確実ではありませんが、トレンチ4や測量成果から金蔵山古墳の墳長は156m程度となるとみられます。



西側造り出し(トレンチ1) 模式図

まとめ

今年度の調査では、造りだしの前後で墳端に段を設けるなど、予想以上に複雑な墳丘形態が判明しました。一方で、後円部と前方部それぞれの下段平坦面、上段平坦面のつながりや、後円部側の墳端だった平坦面が前方部側でどうなっているのかなどの課題も明確になってきました。調査は来年度以降も継続する予定ですので、こうした課題も今後追求していきたいと思ひます。